

スポーツにおける「性別問題」
—「女性」アスリートに向けられるまなざし—

小 坂 美 保

Sports and Gender Issues: A Look at Female Athletes

OSAKA Miho

Abstract

When an athlete produces a remarkable sports record, he or she will receive both “admiring glances” and “suspicious glances” saying, “Was there dorpings?” In addition to these two kinds of glances, female athletes will also receive “sexual glances” saying “Are you a man?” This report examined gender issues cases in sports studies, taking a female athlete facing an allegation about her gender as the example case. Isn't there a system in the sports world seeking to eliminate the possibility that the performances given by female athletes would exceed those by male athletes as well as to secure fairness in our playing sports? For this reason, female athletes who have demonstrated a high performance will face a “gender allegation” and not be allowed to be categorized as “female athletes”. Such female athletes must have a body that accords to the framework of “female athletes” for participating in a sports competition as a “female athlete”. In modern sports, the rules and culture of sports competition have been formed based on the two-category system of “men” and “women”. Therefore, it can be said that the presence of athletes undermining this two-category system shows the limitation of the modern sports' framework where all athletes are categorized as either “men or women”.

Keywords: female athletes, gender, gender check, Olympic games

要 旨

スポーツにおいて素晴らしい記録が出たとき、当該アスリートには「賞賛のまなざし」と「ドーピングでは？」という「疑惑のまなざし」が向けられる。女性アスリートには、この2つのまなざしだけでなく、「男性では？」という「性別へのまなざし」が加わる。本報告では、性別に疑惑を向けられたある女性アスリートを事例に、スポーツにおける性別問題について考察をおこなった。競技を実施する上での平等性の確保とともに、女性のパフォーマンスが男性をうわまわる可能性を排除しようとする構造がスポーツ界に存在するのではないだろうか。そのために、高いパフォーマンスを発揮した女性アスリートに対して「性別疑惑」が浮上し、「女性選手」のカテゴリーへの包摂を拒むのである。そして、当該選手が「女性選手」として競技に参加するためには、「女性選手」という枠組みに適合する身体にならなければならない。近代スポーツは、「女」か「男」かという二分法をベースに競技のルールや文化が形成されてきた。だからこそ、この二分法を揺るがす選手の存在は、近代スポーツが抱える「女性／男性」という枠組みの限界を示しているともいえるのである。

キーワード：女性アスリート、性別、性別確認検査、オリンピック

1. はじめに

スポーツ（競技）において素晴らしい記録が出された時。

当該アスリートに向けられるまなざしは、多くの場合「賞賛のまなざし」だろう。多くの大会において、選手のパフォーマンスは身体を通してタイムなどの「記録」や他者との「競争」によって可視化される。そのため、好記録や他の選手に対する卓越性がみている私たち（あるいは一緒に競技を行っている選手同士）の想像をこえたとき、「賞賛」のまなざしがうまれる。しかし、その「賞賛」とともに、その「身体」がホンモノかと疑うまなざしをもつ人も少なくない。つまり、何らかの人為的な力を用いて競技能力を向上させているのではないか、「ドーピングではないか？」という「疑念のまなざし」である。

現在、多くのスポーツ（競技スポーツ）において男女別でのゲームやパフォーマンスが行われている。多くの人びとが知る「オリンピック・パラリンピック」においてもほとんどの競技が男女別で実施されている。男性アスリートによる卓越的なパフォーマンスは、「賞賛」か「ドーピングでは（疑惑）」と2つのまなざしにさらされる。しかし、女性アスリートにはもう1つまなざしに加わる。それは、「男性なのでは？—性別への疑義」という身体に向けられるまなざしである。なぜ、女性アスリートにのみ、第3のまなざし「性別への疑義」が向けられなければならないのか。

本研究は、スポーツという現象において性別へのまなざしがこれほど強固に「女性」に向けられる点に着目し、ある女性アスリートを事例にスポーツにおける性別問題について検討していく。

2. 先行研究の検討

スポーツにおける「性別」問題は、古くて新しいテーマである。19世紀に発展した近代スポーツの担い手の多くが男性であった。そのため、男性が女性よりも優れた存在であることを示す仕組みを組み込みながら発展してきた経緯がある（井谷、2012、p.40）。そのため、スポーツと性別に関する研究の多くが、

女性の競技スポーツ普及に関するものである。具体的には、男性によってつくられた近代スポーツにいかに関与が参加していくか、という点を競技への参加者数・参加率、実施種目数、選手の数、役員の数、指導者の数等において論じるものである。スポーツ（の実施）における男女平等をいかにつくりあげていくかが論点とされる。また、近年とりあげられるテーマとして「性カテゴリーの扱い」があげられる。これらの研究は、近藤・友添（2000）や来田（2010）があり、国際オリンピック委員会による身体的性別の境界を性別確認検査の実施や IOC の規則成立の過程から丹念におっている。また、1960年代からの性別確認検査の実施、1990年代の廃止、それ以降の選手の性別に関する問題にともなう競技への参加資格についてふれている。本研究では、特に近藤・友添（2000）と来田（2010）に依拠しつつ、なぜ女性アスリートに対して強固な性別問題が生じるのかについて検討していきたい。

3. アスリートと“Sex Check”

女性選手が好記録を出した場合、2つの疑惑にさらされることは理解できよう。それは、「ドーピング」と「男ではないか？（＝性別疑惑）」である。性別疑惑の多くは「女性アスリート」のみに向けられ、そのパフォーマンスに対して「男性並みの記録」「驚異的な強さ」「2位以下との差」という語りが用いられる¹。また、女性選手に対して1960年代なかばから1990年代までドーピング検査とともに「性別確認検査（Sex Check）」が行われていた事実からも2つの疑惑の存在を理解することができる。

3.1 女性アスリートとドーピング

ドーピングは、1988年のソウル・オリンピックにおいてベン・ジョンソン選手が金メダルをはく奪されたことにより、多くの人びとが知ることとなったといえよう。ベン・ジョンソン選手は、筋肉増強剤などの禁止薬物を用いること

1 例えば、本報告で取り上げる「キャスター・セメンヤ選手」が2009年に出場した世界陸上競技大会の800 m 決勝の放映においてアナウンサーが発した言葉がこれらである。

により競技能力を人為的に高めていたことからドーピング違反となった。

ドーピングとは、1964年の東京オリンピックでの国際スポーツ科学会議のドーピング委員会において以下のように定義された。

「生体には生理的に存在しない物質はいかなる方法で投与されても、また生理的に存在する物質は異常な量あるいは方法で投与または使用された場合、それが競技能力を高めることが目的であればドーピングと認める」
(黒田、1990、p.544)

オリンピックにおけるドーピングは、1960年のローマ大会で初めて明るみに
でた。自転車の100 km 道路競走でデンマークの選手が日射病で倒れその後死亡
した際、血管拡張剤を用いていたことを監督が認め、ドーピングによる死亡
事故として報じられた。興奮剤などの使用により競技力を向上させるドーピン
グ行為が、1960年代前半には死亡事故を引き起こすほど行われていたのであ
る。女性選手のドーピング違反は、1984年のロサンゼルス・オリンピックにお
いてギリシアのやり投げ選手が筋肉増強剤を使用し失格処分になったことが報
じられている(朝日新聞・夕刊、1984、p.10)。また、1989年にはアメリカの
女子元オリンピック選手(女子陸上短距離選手)が1984年のロサンゼルス・オ
リンピック前からコーチの勧めで積極的に筋肉増強剤を使用していたことを告
白している(朝日新聞、1989a、p.23)。さらに、旧東ドイツの元水泳女子オリ
ンピック代表のクリスチーネ・クナッケ選手(1980年のモスクワ・オリンピッ
ク100 m バタフライで銅メダル獲得)は、自身の子どもの奇病が選手時代の
ドーピング(筋肉増強剤を使用)の副作用であることを告白している(朝日新
聞、1989b、p.23)。同じく、旧東ドイツの女子砲丸投げのアンドレアス・ク
リーガー(以前はハイディ・クリーガー)選手は、1983年に最初の男性ホルモ
ン薬剤の投与を受け、10代の選手の多くが男性ホルモン剤(違反薬物)とは知
られずに投与されていたことを告白している。彼女は、男性ホルモン剤投与
の副作用と明言はしていないが、自身の「性」に違和感を持ち、性転換をし、

現在は「男性」として生活している。

このように、多くの女性選手の競技力を向上させる目的でアナボリック・ステロイド（筋肉増強剤）が用いられていた。近代スポーツの多くは、筋力や瞬発力など男性が優位な「能力」や「体力」を基準に作られてきた（伊藤、1999、p.118）。そのため、「筋力」や「瞬発力」が大きく影響する陸上競技（特に短距離）やウェイトリフティングなどでは筋肉増強剤の効果が期待され多用されてきた経緯がある。その他に、女性選手に対して「中絶ドーピング」が行われてきた歴史もある。友添は、「旧東側諸国では、妊娠初期にタンパク同化ホルモンの急激な分泌で母体が筋力向上に最適であることに着目し、女性選手に人工妊娠させ、中絶させるという中絶ドーピングが行われ」ていたという（友添、2000、p.48）。ホルモンの変化による筋肉増強が女性選手の競技力向上において重要視されていたことがうかがえる。

このようなドーピング行為に対して、1968年のグルノーブルオリンピック（冬季大会）、メキシコ・オリンピック（夏季大会）から「ドーピング検査」²

2 現在のドーピング行為については、世界アンチドーピング機構が以下のように規定している。世界アンチドーピング機構（World Anti-Doping Agency, WADA）は、世界ドーピング防止プログラムを整備する国際的な機関である。WADA の規程によると、ドーピングとは、以下に示す8つのドーピング防止規則違反のいずれか1つが発生することをいう（齋藤、2011、pp.207-208）。

- ①競技者の検体に禁止物質または代謝物もしくはマーカーが存在すること
- ②容疑者が禁止物質もしくは禁止方法を使用することまたはその使用を企てること
- ③検体の採取を拒否し、もしくはやむを得ない理由によることなく検体の採取を行わず、またはその他の手段で検体の採取を回避すること
- ④競技者が競技会外への検査への競技者の参加に関する要請に違反すること（居場所情報未提出および検査未了を含む）
- ⑤ドーピング・コントロールの一部に不当な改変を施し、または不当な改変を企てること
- ⑥禁止物質または禁止方法を保有すること
- ⑦禁止物質もしくは禁止方法の不正取引を実行し、または不正取引を企てること
- ⑧競技者に対して禁止物質もしくは禁止方法を投与すること、もしくは投与を企てること、またはドーピング防止規則違反を伴う形で支援し、助長し、教唆し、隠

が導入された。あわせて、女性選手に対してのみ国際オリンピック委員会 (IOC) は、「性別確認検査」を開始している (鈴木・小石原・来田、2016、p.5)。

3.2 「女性」アスリートにのみ向けられる疑惑

ドーピング検査の導入とともに、女性選手のみを対象とした「性別確認検査」がオリンピック等に導入された。オリンピックでは、1990年代なかばまで全女子選手を対象に「性別検査」を実施していた。方法は、口内の粘膜から染色体を採り、「XY 型」なら男性、「XX 型」なら女性と判定していた。

なぜ、性別確認検査が導入されなければならなかったのだろうか。男性が女性と偽って競技に参加することがあったということか。男女の選手の違いは、外見によって区別することができると思われる (近藤、2000、p.74)。しかし、性別確認検査が実施される以前、女性選手が男性ではないかと疑われる例があった。近藤 (2000) によれば、1936年のベルリン・オリンピックの走高跳びで世界記録を樹立した選手が、ヒトラーによって命令され「女性」で競技したことを告白していたり、1952年のオスロ冬季オリンピックでメダルを取った二人のフランス「女性」選手が、その後、男性に性転換して女性と結婚して子どもがいるそうである (近藤、2000、pp.74-75)。その他にも、過去にあった性別問題として2010年8月24日の朝日新聞 (朝刊) は、以下の3つの事例を紹介している。

- ・1930年代にオリンピックでメダル2個を獲得したポーランドの短距離選手が引退後に強盗事件に巻き込まれ、撃たれて死亡した際、検視すると男性器があり染色体も男性と女性の両型をもっていた。
- ・1960年代、旧ソ連の投擲選手としてオリンピックで複数のメダルを獲得し、26の世界記録をつくった姉妹に性別疑惑が浮上し、性別検査が導入されると、その選手は表舞台から姿を消した。
- ・2006年ドーハ・アジア大会の陸上女子800mで銀メダルだったインドの

蔽し、もしくはその他の形で違反を協働すること、もしくはこれらを企てること
(齋藤、2011、p.208)

選手に性別疑惑が浮上し、検査の結果、男性が偽って出場していたことがわかり失格となった。

(朝日新聞2010年8月24日朝刊21ページ：東京版)

性別検査実施以前、女性と偽って出場した選手や男性から女性に性転換した選手、半陰陽選手、両性具有の選手が「女性部門」に出場していた(近藤、2000、p. 75)。性別確認検査が必要とされた背景には、「男女には競技能力に差があって、一緒に試合をすると不公平(女性が勝てないこと)になるから」(近藤、2000、p. 74)と競技における公平性が理由としてあげられる。また、来田は「近代スポーツの中でも、特に高いパフォーマンスを競う競技的なものにおいては、実施カテゴリーを峻別して扱うことが一般的である。この前提には、スポーツに関し、両性の身体的パフォーマンスは異なるという解釈がある。すなわち、男性によるパフォーマンスは、平均的に女性よりもレベルが高く、トップレベルになればなるほど、女性のパフォーマンス到達点との差が絶対的であるとされている」(来田、2010、p. 25)と指摘する。つまり、近代スポーツというカテゴリーにおいて、男女のトップレベルのパフォーマンスに対して女性<男性の構図が崩れてはならなかったと解釈できる。そのため、女性のパフォーマンスが非常に高かった場合、同カテゴリーで競う女性選手の平等性を担保する以上に、男性の優位性を脅かす存在となり、その選手が「女性」ではないことがもとめられるのではないだろうか。近代スポーツにおいて、「女性」

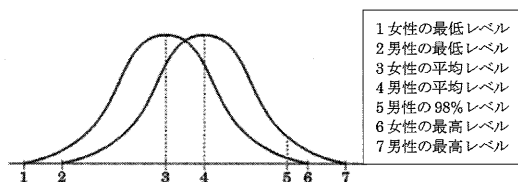


図 スポーツにおける技術と能力の男女差

[出典：C. C. Vogler and S. E. Schwartz, The Sociology of Sport, Prentice-Hall, 1993]

伊藤 (1999) 「スポーツとジェンダー」 p. 118より転載

は排除されてきた存在であった（近藤、2000、p. 74）。スポーツの多くが男性だけでつくられ、そのため「男性向き」であった（近藤、2000、p. 74：来田、2010、p. 25）。つまり、男性のための活動である（あった）スポーツにおいて、女性が優位になることは難しいというよりも、女性が優位になることで女性く男性の構図が崩れてしまうことが問題とされたのである。

4. ある「女性アスリート」の場合

4.1 ある「女性アスリート」とは

2009（平成21）年にベルリンで行われた世界陸上選手権大会は、選手の「性別問題」に関するターニングポイントといえる。それは、陸上女子800m競走の決勝において圧倒的な強さをみせ優勝したキャスター・セメンヤ選手をめぐる出来事である。

朝日新聞 2009年8月22日 夕刊 10ページ 東京本社

女子陸上覇者「男じゃないか」

疑惑の声に南ア社会反発

【ナイロビ】京格博「世界陸上選手権の女子800mで優勝した南アフリカのキャスター・セメンヤ選手18に「男疑惑」が持ち上がり、国際陸連が性別検査を進めている問題で、南ア選手で疑念が起きている。セメンヤ選手は18日、女子800m決勝で1分55秒の今年世界最高記録を出したが、驚異的な記録に加え、筋肉量と体格と顔立ちから疑念を指摘する声が出た。これに対して、南アの地元紙は

昔からいじめられた

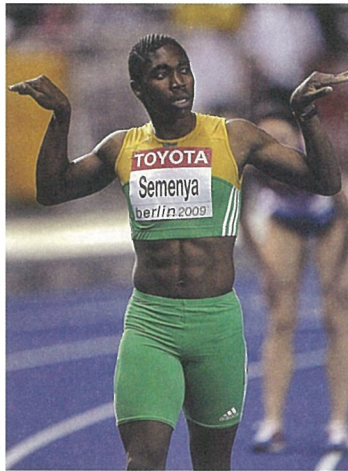
20日、北ザンベジの村で暮らすセム・マフさん（40）が「神様が彼を外見をまやこ作ったんだ」と憤ったと報じた。セメンヤさん以前から外見が異なるといわれてきたという。中学時代の校長「彼が男と男を思っていた。だが父親（マフさん）は「いじめに動かない人間になれ」と育てた。間違いない女性だと100万圓も罰金を払った。年々ザンベジ民族は20日、「我々の美少女の恥辱を国民に求める。体格や走法を理由に性別を疑問視する人々を非難する」との声明を出した。「疑念は帝国王者の尊厳のなす疑念」との声も上がっており、人権団体の批判の標的を帯び始めた。

疑念にやむ、当のセメンヤ選手は南ア代表団の責任者に「私は男じゃない。なぜ私を連れてきたか。地元の村に連れてくるべきだったのに」と詰問して、当初は女性化儀式への参加も断っていたとい

20日、北ザンベジの村で暮らすセム・マフさん（40）が「神様が彼を外見をまやこ作ったんだ」と憤ったと報じた。セメンヤさん以前から外見が異なるといわれてきたという。中学時代の校長「彼が男と男を思っていた。だが父親（マフさん）は「いじめに動かない人間になれ」と育てた。間違いない女性だと100万圓も罰金を払った。年々ザンベジ民族は20日、「我々の美少女の恥辱を国民に求める。体格や走法を理由に性別を疑問視する人々を非難する」との声明を出した。「疑念は帝国王者の尊厳のなす疑念」との声も上がっており、人権団体の批判の標的を帯び始めた。

疑念にやむ、当のセメンヤ選手は南ア代表団の責任者に「私は男じゃない。なぜ私を連れてきたか。地元の村に連れてくるべきだったのに」と詰問して、当初は女性化儀式への参加も断っていたとい

キャスター・セメンヤ選手の性別疑惑を報道する新聞記事
（朝日新聞2009年8月22日夕刊 p. 19：東京版、聞蔵より）
※白い部分には、セメンヤ選手の写真が挿入されていた



【写真】 2009年ベルリン世界陸上選手権大会女子800 m 決勝に出場したセメンヤ選手
livedoor' NEWS より転載「キャスター・セメンヤ／第12回世界陸上 ベルリン
2009（2009年8月20日19時40分フォート・キシモト）」
http://news.livedoor.com/article/image_detail/8000368/

キャスター・セメンヤ選手（Caster Semenya, 1991-、南アフリカ）は、2009年ベルリンで行われた世界陸上競技選手権大会の女子800 mに出場し、2年前に行われた前大会の金メダリストであったジェネス・ジェブコスゲイ（ケニア）に2秒以上の大差をつけ、そのシーズンの世界最高のタイムで圧勝した。そのレース後から、圧倒的なパフォーマンスをみせたセメンヤ選手に対して筋肉質な体格、低い声などから性別を疑う報道がなされた。この疑惑に対して、国際陸上連盟（IAAF）は調査を開始することとなる。1996年のアトランタ・オリンピック以降、女性参加選手に対する性別確認検査は廃止されており、選手の性別に関する問題は個別に対応することとなっている。

4.2 「何」が問題だったのか

国際陸上競技連盟（IAAF）は、キャスター・セメンヤ選手の問題を「This is a medical issue and not a doping issue. by IAAF spokesman, Nick Davies」と公表した。IAAFの見解は、「医学的な問題」であり「ドーピング問題ではな

い」と結論、セメンヤ選手の金メダルはく奪の可能性がないことを示した。つまり、性別疑惑ではなく、ドーピング違反をしているかしていないかについて見解を示したことになり、セメンヤ選手はドーピングを行ってはいなかったということだ。

しかし、2009（平成21）年9月、オーストラリア紙シドニー・モーニング・ヘラルドなどがセメンヤ選手の調査結果を報道することとなる。セメンヤ選手は「子宮と卵巣がなく、体内に精巣がある」「通常の女性の3倍以上のテストステロン（男性ホルモンの一種）を分泌」「両性具有である」とIAAFが示した結論以上の情報が全世界に配信されたのである。ここでの問題は、ドーピング行為に関しては違反を犯していないセメンヤ選手が、自然な体の状態において「通常の女性の3倍以上のテストステロン」を分泌していたことである。ドーピング行為において、競技力を向上させようとしたとき、筋肉量を増加することが行われる。その際、男性ホルモンを摂取することによって筋肉量を増加させることができる。つまり、セメンヤ選手の場合、彼女自身が意図しないところで体内において筋肉増強剤が生成されていたことになる。体内に精巣がある、両性具有であるということ以上に、競技を開催する側や非当事者（競技を一緒に行う他の選手）にとって「男性ホルモン」の「量」が問題とされている点に注目したい。

4.3 男性か女性か—二分法では問題解決しない現実—

女性選手のみに行われた「性別確認検査」は、1996年のアトランタ・オリンピック以降、2000年のシドニー・オリンピックから廃止され、問題が起きたときに個別対応することとなった。性別確認検査の廃止は、1996年のアトランタ・オリンピックにおいても3,300人あまりの女性参加選手のうち8人に男性型のY染色体があり、それらの選手は結果的に性分化疾患（DSD）³と判断されて出場が認められたということによる。つまり、染色体による判断によって「男性」「女性」の区別が難しく、染色体が出場の可否を判断する材料となり得

3 性分化疾患（DSD, disorders of sex development）は、生まれつき性染色体や性器、性腺などが男性か女性かで統一されず、性があいまいな状態をいう。

なくなったのである。

近藤（2000）によるとオリンピックで実施されていた性別確認検査は、女性競技への参加を希望する選手全員に検査を行う（つまり、検査を受けなければ参加できない）。厳密に検査をするには、時間と費用も掛かるため、第一次検査として性染色質検査を行い、性分化異常が疑われた選手がより時間と手間のかかる性染色体分析、さらに婦人科、泌尿器科学的検索を行い最終的に国際オリンピック委員会（IOC）の医事委員会が男性か女性かを決定していた。検査技術の進展にともない上述のような検査過程となっているが、かつては産婦人科の医者や判定員の前を女性選手が裸で歩き、性別確認が行われていたという記録が残っている（近藤、2000、p.75）。近藤は、この女性選手に対する性別確認検査の問題点として、「これまで女性として生活、競技してきた性分化異常選手を男性とするか、女性とするか」をあげ、具体的に①性の判定はむずかしい、②名誉棄損やプライバシー侵害の恐れ、③インフォームド・コンセントが重要、と3つをあげている（近藤、2000、pp.75-79）。

セメンヤ選手の問題は、競技を開催する側や一緒に競技をする選手にとっては、「通常の女性の3倍以上のテストステロンを分泌」していたことが問題の核心となるが、セメンヤ選手自身にとっては「選手自身の尊厳とプライバシーの権利を含む、人間としての根本的な権利が侵された」ことが問題の核心になるのではないだろうか。しかしながら、セメンヤ選手をめぐる問題は、彼女自身の非常にデリケートな問題がオープンにされたこと以上に、テストステロンなどの男性ホルモンの量が問題とされるのである。

5. 「性（別）」という枠組みへの再編

キャスター・セメンヤ選手は、2009年の報道以降、非公式に大会への出場の内粛が求められた。そして、2010年3月には、南アフリカ陸上連盟から公式な出場停止処分を受ける。セメンヤ選手がアスリートを続けるには、「性別検査」をクリアする必要があることとなる。そのため、セメンヤ選手は2010年6月、性別検査をクリアしたうえで競技に復帰する意向を示し、2010年7月に

IAAF は、セメンヤ選手の「女性としての競技復帰」を認めた。

IAAF は、2009年の世界陸上競技選手権ベルリン大会以降、両性具有の選手で男性ホルモン過剰症である場合、他の選手に対して不当な利点を持つと判断した。そのため、2011年にはテストステロンなど男性ホルモンに関する制限を設ける。テストステロンなどの男性ホルモンの分泌が一定以上になった場合、女性選手としては競技には出られないという規則が制定された。つまり、ホルモン過剰症である女性アスリートは、競技に参加するにはこの設定枠をこえないようにテストステロンの分泌を抑制する薬を飲むことが条件とされたのである。

このような国際陸上競技連盟 (IAAF) の動きは、「競技的なスポーツの世界がセメンヤ選手を『女性として再定義する』という解決によってセメンヤ問題の幕引きを行った」と來田 (來田、2010、p. 35) が指摘するように「女性」「男性」という性別の枠組みに選手を再編成した。女性と男性の境界は、さまざまな点からあいまいになりつつあるといえる。そのような社会において、スポーツという世界は「女性」「男性」の2つの枠組みをかたくなに守ろうとしたのだ。選手は、競技に参加するためにこの枠組みに従わざるを得ないのである。しかし、このような「性 (別)」という枠組みの力は、女性アスリート、そし



【写真】 2016年リオ・オリンピック陸上女子800 m に出場したキャスター・セメンヤ選手

<https://mainichi.jp/sportsspecial/articles/20160822/k00/00m/050/025000c> より

てトランスジェンダーの選手にのみ強固に働くといってよいだろう。

6. スポーツ界における「性別」の物差しへのゆらぎ

6.1 ホルモンでははかれない女／男（性別）

2014年、インドの女性短距離選手のデュティ・チャンド選手⁴は、英連邦選手権の開催2週間前の性別検査で不合格（女性のカテゴリーで出場することが認められなかった）とされた。チャンド選手は、男性ホルモンの分泌量が男性だけにみられる量に達していた。しかし、彼女はこの決定に納得できず、スポーツ仲裁裁判所に訴えを行い、「男性ホルモンを物差しとして性別を決定するテストの有効性を問う」たのである。この訴えに対し、スポーツ仲裁裁判所は国際陸上連盟に対して2017年7月までに「男性ホルモンと競技の不当性を結びつける証拠を提供できなければ、規制は撤廃される」とし、まず両性具有者についての規制を2年間停止した。

チャンド選手は、リオ・オリンピックの陸上女子100m競走に出場した。こ



【写真】デュティ・チャンド選手

https://en.wikipedia.org/wiki/Dutee_Chand より

4 デュティ・チャンド選手およびキャスター・セメンヤ選手については、下記 URL の記事が多くを示唆および情報を与えてくれた。<https://www.nexdsd.com/one-track-minds>

の種目でインドの選手が出場するのは、36年ぶりの出来事であった。入賞はできなかったが、オリンピックの出場を自らの力で勝ち取ったことが重要である。また、彼女によってホルモン過剰症の選手が、何らかの人為的な規制をされることなく自然な身体の状態で競技に臨むことができたのである。

6.2 ホルモンによる規定がある参加資格

男性から女性に性移行（トランスジェンダー）のアスリートの問題はどうか。

スポーツ界におけるトランスジェンダーの参加規則は、2004年国際オリンピック委員会（IOC）において次のように定められた。

- ①性別適合手術を受けていること
- ②法的に新しい性別になっていること
- ③手術後、適切なホルモン治療を少なくとも2年以上受けていること

つまり、身体的な性移行、社会的な性移行とともに「ホルモン」が基準とされたのである。この参加基準を医学的科学的観点からみたとき、複数の医師は「女性から男性になった選手だけでなく、男性から女性になった選手にとっても競技の公正性から考えておおむね妥当」としている。③の適切なホルモン治療は、男性から女性に移行した選手の場合、男性ホルモンを抑制するもので、女性から男性に移行した選手の場合、男性化を維持しつつ、ドーピングを考慮しなければならないものである。

2015年11月、国際オリンピック委員会（IOC）は、トランスジェンダーの選手の出場に関して新しいガイドラインを示した⁵。ただし、公平性を保持するために性転換の方向（男性から女性、女性から男性）によってガイドラインは異なる。ここでは、①女性から男性へ性転換した場合には性適合手術は必要ない、②男性から女性に性転換した場合は、女性であるというジェンダーアイデ

5 このガイドラインは、IOC Consensus Meeting on Sex Reassignment and Hyperandrogenism November 2015に示されている。

ンティティをもち、スポーツのために最低でも4年間は再性転換することはないと宣言する必要がある。また、大会の12か月以上前からテストステロンの値が10 nmol/L 以下である必要があり、定期的にテストステロン値を計測する必要がある、とされた。2004年の規則から大きな変化がみられたが、やはり「ホルモンの量」規定が存在している⁶。

7. まとめにかえて—ある「女性アスリート」のその後—

通常の女性とは誰をさすのであろう…。女性だけでなく男性も含め、多くの人びとは自分のホルモン量など知らないし、知る機会も少ないだろう。しかし、アスリートであるがゆえに、自分自身が望まない情報を得、その情報が全世界の知るところになることもある。

本報告で取り上げたキャスター・セメンヤ選手は、アスリートであるがゆえに自身のプライベートな情報が全世界に配信された。そして、競技を続けていくために、自然な体の状態を人為的にコントロールしなければならなかった。セメンヤ選手が復帰し出場した2012年のロンドン・オリンピックは、ロシアのマリア・サビノワ選手が金メダルを獲得し、セメンヤ選手は銀メダルという結果となった。しかし、2014年のソチ・オリンピック（冬季オリンピック）を発端とするロシアの組織的なドーピング問題が明らかにされる過程において、マリア・サビノワ選手の禁止薬物であるオキサンドロロン（経口アナボリックステロイドの1つ）の使用によるドーピング違反も発覚した。

キャスター・セメンヤ選手は、自然な身体の状態で男性ホルモン過剰症とされ、人為的な治療によって適切なホルモン量と認められた場合に競技に参加することが許された。一方で、セメンヤ選手を破り金メダルを獲得したサビノワ

6 男性と比較すると女性のテストステロンホルモンの分泌量は低く平均的に男性の正常値範囲の10分の1～20分の1程度であることが確認されている。また、男性のテストステロン検査値の基準値は、低下が認められる範囲：1.99 ng/ml 以下、基準値の範囲：2.00–7.60 ng/ml、上昇が認められる範囲：7.60 ng/ml 以上とされている。
<http://www.kensa-book.com/expression/t-sterone.html> より

選手はどうだろうか。彼女自身が望んでドーピング行為をしたかどうかはわからない。ロシアにはそういう文化が存在した、とロシアの組織的ドーピングの実態を告発したユリア・ステパノワ選手⁷は指摘する。一方は自然な状態で男性ホルモンが過剰に分泌される身体をもち規制がかけられ、一方は人為的に男性ホルモンを摂取し競技力を向上させメダルを獲得したのである。

しかし、この状況は一人の選手により変化をみせることとなった。デュティ・チャンド選手の訴えは、2015年から2年間、両性具有者についての規制を停止させた。2016年に開催されたりオ・オリンピックでは、両性具有選手は抑制剤の摂取をすることなく競技に参加することが可能となったのである。キャスター・セメンヤ選手は、リオ・オリンピックで南アフリカの旗手を務め、女子800m競走において優勝し、現在も競技を続けている。

近代スポーツは、「女」か「男」という二分法をベースに競技のルールや文化が形成されてきた。だからこそ、その二分法を揺るがす選手の存在は、近代スポーツが抱える「女性／男性」という枠組みの限界を示しているともいえる。一方で、性別やジェンダー、トランスジェンダーの選手への対応は、スポーツ界がどの社会よりも早く対応しているともみることができる。

スポーツはこれからどこへ向かうのだろうか。特に「性別問題」において。

キャスター・セメンヤ選手をめぐる報道から考えると、高いパフォーマンスをみせる「女性アスリート」はその性別に疑義が呈されたとき、「男性」と判断されることが求められているのではないだろうか。そう判断されることにより、スポーツにおける男性＞女性という男性が優位である構図が維持されるのである。このまなざしは、女性アスリート同士に向けられるものであり、男性アスリートから女性アスリートに向けられるまなざしといえよう。そして、選手を統括する競技団体そのものが男性＞女性の構図が揺るがされるのを拒んでいるのではないだろうか。

7 ユリア・ステパノワ（1986－）はロシアの陸上選手であり、ロシアのアンチドーピング機構（RUSADA）の元職員である夫とともにドイツのテレビ番組にロシアの組織的ドーピングを告発した人物である。

今後のスポーツを考えたとき、これまで当たり前だと思っていた「女性」「男性」のカテゴリーがなくなってしまうたのだろうか。選手はどのようなゲームを行うのだろうか。そして、観戦する人びとはどのように「スポーツ」をみるのだろうか。矛盾するかもしれないが、性別カテゴリーがあったからこそ、女性が果敢に男性のものとされていたスポーツの世界に飛び込むことができたのかもしれない。ただ、スポーツが成熟してきた現代社会において、性別カテゴリーがどのように機能していくのか慎重に検討していきたい。

【謝辞】

本報告は、神戸女学院大学女性学インスティテュート主催の第1回女性学研究（2017年6月23日実施）において「スポーツにおける『性別問題』—「女性」アスリートに向けられるまなざし—」と題して報告した内容をベースに加筆修正等を行い作成したものである。発表および論集への執筆の機会を与えてくださった女性学インスティテュートのみなさまをはじめ、発表に対して様々なコメントを下された先生方に感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 朝日新聞、1984、夕刊（東京版）1984年8月31日、p.10
朝日新聞、1989a、朝刊（東京版）1989年3月1日、p.23
朝日新聞、1989b、朝刊（東京版）1989年7月11日、p.23
朝日新聞、2009、夕刊（東京版）2009年8月22日、p.19
井谷恵子（2012）、「ジェンダー研究のフロンティアスポーツにおける性別二元論の行方（JSSGS 第10回記念大会報告シンポジウム）」、日本スポーツとジェンダー学会『スポーツとジェンダー研究』、Vol. 10、pp. 40-44
伊藤公雄（1999）、「スポーツとジェンダー」、井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』、世界思想社：京都、pp. 114-129
近藤良享（2000）、『性別はスポーツ団体が決める？—動揺する女性選手—』、近藤良享・友添秀則、『スポーツ倫理を問う』、大修館書店：東京、pp. 73-80
近藤良享・友添秀則（2000）、『スポーツ倫理を問う』、大修館書店：東京
近藤良享（2005）「スポーツと性別—女性確認検査／性転換選手容認の問題—」、愛知学

- 泉大学『コミュニティ政策研究』、Vol. 7、pp. 21-27
- 黒田善男 (1990)、「スポーツと薬物：とくに近代スポーツにおけるドーピングとアンチ・ドーピング活動について」、日本臨床スポーツ医学会『臨床スポーツ医学』、Vol. 19 (5)、pp. 544-554
- 松宮智生 (2016)、「スポーツにおける男女二元制に関する一試論—性別確認検査における女子競技者の基準を起点に—」、国土館大学体育学部附属体育研究所『国土館大学体育研究所報』、第35巻、pp. 19-27
- 村田善晴 (2005)、「医学的に見た性の分化—男性ホルモン（アンドロゲン）の役割—」、愛知学泉大学『コミュニティ政策研究』、Vol. 7、pp. 13-19
- 日本スポーツとジェンダー学会 (2012)、「ジェンダー研究のフロンティアスポーツにおける性別二元論の行方—(JSSGS 第10回記念大会報告シンポジウム)」、日本スポーツとジェンダー学会『スポーツとジェンダー研究』、Vol. 10、pp. 40-44
- 来田享子 (2005)「はじめに シンポジウム開催趣旨と概要（＜特集＞愛知学泉大学コミュニティ政策研究所第12回シンポジウム「性別を考える」—医学・法学・スポーツ科学の対話—）」、愛知学泉大学『コミュニティ政策研究』、Vol. 7、pp. 1-10
- 来田享子 (2010)、「スポーツと「性別」の境界」、日本スポーツ社会学会『スポーツ社会学研究』、vol. 18(2)、pp. 23-38
- 齋藤健司 (2011)、「第4節 アンチ・ドーピング政策」、菊幸一ほか編、『スポーツ政策論』、成文堂：東京、pp. 205-212
- 鈴木楓太・小石原美保・来田享子 (2016)、「年表でみるスポーツ・女性・ジェンダー（1900～2015年）」、日本スポーツとジェンダー学会編、『データでみる スポーツとジェンダー』、八千代出版株式会社：東京、pp. 1-16
- 谷口雅子 (1998)「スポーツにおける規範の形態とジェンダー」、日本スポーツ社会学会『スポーツ社会学研究』、Vol. 6、pp. 58-69、127
- 建石真公子 (2015)「オリンピック・ムーブメントとジェンダー IOC の提言の射程と課題」、日本スポーツ体育健康科学学術連合第1回大会発表原稿、<http://jaaspehs.com/wp/wp-content/uploads/2017/03/cc9b17355a9c432b8c2485e5falc4a4e.pdf> より
- 友添秀則 (2000)、「勝利は人命よりも尊いか—ドーピングの現実—」、近藤良享・友添秀則、『スポーツ倫理を問う』、大修館書店：東京、pp. 41-49
- 山口理恵子 (2008)、「スポーツの近代化における性別二元化体制」、共愛学園前橋国際大学『共愛学園前橋国際大学』、Vol. 8、pp. 45-62
- 山口理恵子 (2010)、「スポーツ・ジェンダー研究の『まなざし』について」、日本スポーツ社会学会『スポーツ社会学研究』、Vol. 18(2)、pp. 39-52